

Vol.
31&32

人社研 Newsletter



2013（H25）年度
後半期博士学位取得
（社会文化科学研究科及び
人文社会科学研究科後期課程）



2014（H26）年度
前半期博士学位取得
（人文社会科学研究科後期課程）

目次

巻頭辞	2
2013年度後半期及び2014年度前半期学位授与式	3
2014年度新規科目担当者	4
科学研究費（新規）プロジェクト	4

所属教員による出版物	5
博士後期課程大学院生業績（メディア掲載）	6

人文社会科学研究科が進むべき途

人文社会科学研究科長 大塚成男
(兼・社会文化科学研究科長)

2014年は人文社会科学系大学院の研究科長を務めている立場として、たいへんにショッキングな出来事がありました。国立大学法人は第2期中期計画の5年目を終え、第3期中期計画の策定作業に入っています。その第3期中期計画の策定に向けて文部科学省の大学評価委員会が9月に取り纏めた「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しに関する視点」の中で、人文社会科学系大学院の組織の廃止や他の分野への転換を検討することが求められたのです。

そのような要請がどのような理由で行われたのかは明確には説明されていません。ただ、その要請の中で示されている国立大学の役割から推測すれば、人文社会科学系大学院は私立大学にも多数設置されていることや、「高い付加価値を生み出す国立大学」という方向性に合致しないとみなされてしまったことが背景にあると推測されます。

もしそのような認識に基づいて国立大学の方向性が定められるのであれば、人文社会科学系の研究教育に携わってきた者として、強く異議を唱えたい。確かに人文社会科学系大学院は、産業的なイノベーションを促進する技術的な成果を生み出すところではないかもしれませんが、また、1本の論文を完成させるのに研究者の一生が費やされることすらある人文社会科学系の分野に短期的な成果や数量的な成果を求められれば、不利にならざるを得ません。しかし、人文社会科学系の研究成果が歴史の中で大きな役割を果たしてきた事例は無数に存在します。国立大学が人材育成という機能を果たすためにも、人文社会科学は今後も重要な構成要素の1つとみなされるべきでしょう。

ただし、廃止・転換を求める要請が行われたという事実を無視することもできません。私は、人文社会科学研究科は「人」と「社会」を融合的・横断的に教育研究する大学院であると考えています。それだけに、国立大学における人文社会科学系大学院の廃止・転換が真に「人」と「社会」からの要請であるのかを、人文社会科学研究科として究明していくことが求められるでしょう。冒頭に取り上げた「視点」でも、すべての要請は「～ではないか」という問い掛けの形式になっています。その問い掛けに対して、「人文社会科学系大学院は必要である」という強い回答を示していかなければいけません。

そのために必要なものは、第一に、社会との対話でしょう。私自身、自らの研究教育活動の中で、千葉大学を取り巻く地域には千葉大学に対する強い期待があることを感じています。少子高齢化・人口減少に伴う数多くの問題を解決するための社会的な取り組みの中で、人文社会科学研究科が果たし得る役割は大きいはずです。

また、「視点」の中でも求められている国立大学の国際化にあたっても、人文社会科学研究科は大きな役割を果たしていくことができます。人文社会科学研究科を含めた人文社会科学系大学院は、国際化そのものを教育研究活動の目的の1つとしていくことができます。人文社会科学研究科を核とした国際的な研究教育のネットワークを構築することで、人文社会科学研究科の存在意義が高まるでしょう。

人文社会科学として怖れるべきことは、1つの価値観のみに基づく方向性に従うことを強いられることではないかと思います。多様で多元的な価値観が認められるべきでしょう。そしてそのためには、それらの多様で多元的な価値観を外に向かって積極的に発信をしていくことが必要です。

人文社会科学研究科は今後もその姿を変えていくことが予定されています。その中で、人文社会科学研究科ができることは何かが問われていくことになるでしょう。

2013（H25）年度後半期学位授与式および修了者祝賀会

2014年3月26日、文学部棟2階203講義室において学位授与式が行われ、以下に掲載する1名の方が社会文化科学研究科を修了して学位（博士）を、11名の方が人文社会科学研究科博士後期課程を修了して学位（博士）を（表紙写真）、52名の方が人文社会科学研究科博士前期課程を修了して学位（修士）を（右写真）取得されました。

また、学位授与式後、千葉大学生生活協同組合カフェテリアにおいて修了祝賀会が催されました。



2013年度後半期社会文化科学研究科修了者（2014年3月）

氏名	博士論文題名	取得学位
入江俊夫	概念形成の哲学のために—ウィットゲンシュタインの数学の哲学—	博士(文学)

2013年度後半期人文社会科学研究科後期課程修了者（2014年3月）

氏名	博士論文題名	取得学位
阿部 学	ある「自由保育」実践のエスノグラフィー〈リアリティ—ファンタジー〉構造の再検討	博士(学術)
楊 昉	日中接触場面における中国語母語話者の不一致応答の言語管理、生成のプロセス	博士(学術)
周 宇嬌	小泉政治論	博士(学術)
大浦明美	ケアとしての身上監護—地域における「その人らしさ」を維持するための支援—	博士(学術)
松葉ひろ美	日本の福祉思想と生命観	博士(学術)
武蔵義弘	色彩をめぐる考察	博士(文学)
池田さつき	指示の「諸相」についての一考察—指示表現の理解における〈情報〉の意義を中心に—	博士(文学)
長山明弘	加曾利E3式土器の「組列」編年と動物形象突起の変遷—土器論を基礎とした先史文化の研究に向けて—	博士(文学)
張 昕	現代日本語における「形式名詞+ダ」型モダリティの記述—その否定的形式を中心に—	博士(文学)
劉 峰	近代日本の「アジア主義」	博士(文学)
金子洋一	国際私法における相続準拠法の適用範囲について	博士(法学)

人文社会科学研究科博士前期課程学位（修士）取得者（2014年3月）

岩崎 祐	柳瀬弘美	加藤慎也	伊吹美貴子	TU JINGYUAN	娜荷芽	野元 葵
新城真寿美	ミラー成三	趙 蘭英	小川洋二	特日格樂薩仁	李 晗	山野 浩志
張 琦	阿部響子	楊 再州	張 雪	NUNUK ENDAH S	大塚 萌	渡部 光
藤田貴士	松島 幹	伊藤隆広	巴依尔塔	榎野沙央理	陳 思文	平岡真一郎
持丸眞弓	吉羽千裕	飯田大輔	藤本匡人	栗本 優	張 厦	
庄 慧	安藤宗規	高柳智子	木田翔一	西川由夏	小野拓美	
田村優実	安藤 啓	河端伸太郎	魏 キン	山田崇央	川島 宏実	
友納千幡	岡田 遼	水芹哲平	佐藤 理	王 楊	小松由梨果	

2014（H26）年度前半期学位授与式および修了者祝賀会

2014年9月27日、人文社会科学系総合研究棟2階マルチメディア会議室で学位授与式が行われ、以下に掲載する2名の方が人文社会科学研究科博士後期課程を修了して学位（博士）を（表紙写真）、1名の方が人文社会科学研究科博士前期課程を修了して学位（修士）を取得されました。

また、学位授与式後、人文社会科学系総合研究棟2階グラジュエイトラウンジにおいて修了祝賀会が催されました（右写真）。



2014年度前半期人文社会科学研究科博士後期課程修了者（2014年9月）

氏 名	論文表題	取得学位
身崎とめ子	視覚の占領—戦後住空間のジェンダーCIE/USIS映画—その影響と限界	博士(学術)
裨麗琦	モンゴル語チャハル方言における漢語借用—動詞と副詞の借用を中心に—	博士(学術)

2014年度前半期人文社会科学研究科博士前期課程修了者（2014年9月）

朱 潔

2014 (H26)年度新規科目担当者

2013年度人文社会科学研究科新規科目担当者は以下の通りです。

課程	専攻	研究教育分野	職名	氏名	科目名
博士前期課程	公共研究	公共思想制度研究	准教授	白川 優治	教育政策・教育行財政論 教育政策・教育行財政論演習
博士前期課程	公共研究	公共思想制度研究	助教	李 想	国際政策論 国際政策論演習
博士前期課程	公共研究	共生社会基盤研究	准教授	高橋 絵里香	医療人類学 医療人類学演習
博士前期課程	社会科学研究	法学基礎理論	教授	専田 泰孝	刑法 刑法演習
博士前期課程	社会科学研究	法学基礎理論	准教授	川瀬 貴之	法理学 法理学演習
博士前期課程	社会科学研究	法学基礎理論	准教授	横田 明美	行政法 行政法演習
博士前期課程	社会科学研究	経済理論・政策学	准教授	岸本 信	産業組織論Ⅰ 産業組織論Ⅱ
博士前期課程	社会科学研究	経済理論・政策学	講師	小林 弦矢	計量経済学Ⅱ データ解析
博士前期課程	総合文化研究	人間行動	教授	西阪 仰	文化変動論 文化変動論演習
博士後期課程	公共研究	公共哲学	教授	西阪 仰	社会的相互行為論
博士後期課程	公共研究	公共哲学	教授	酒井 啓子	中東政治
博士後期課程	公共研究	公共哲学	准教授	五十嵐 誠一	国際関係論
博士後期課程	公共研究	共生文化	准教授	高 民定	言語行動分析論
博士後期課程	公共研究	公共教育	教授	鈴木 隆司	技術・職業教育論
博士後期課程	文化科学研究	比較言語文化	准教授	舘 美貴子	文化学理論
博士後期課程	文化科学研究	比較言語文化	准教授	鳥山 祐介	言語文化論
博士後期課程	文化科学研究	文化情報	准教授	引野 亨輔	日本近世都市社会史
博士後期課程	文化科学研究	文化情報	准教授	山田 俊輔	古代文化形成論

2013 (H25)年度科学研究費新規プロジェクト

2014年度の新規採択は以下の通りです。

1) 代表者名 2) 2014年度予算額 (単位は円。括弧内は間接経費を内数で示す。)

専任教員

基盤研究(B)一般 「儒教的民本主義と国民国家建設一東アジアの政治文化史的比較」

1) 趙 景達教授 2) 4,940,000 (1,140,000)

基盤研究(B)一般 「大規模教員研修を契機にした教員間交流展開の海外学術調査」

1) 吉田雅巳教授 2) 1,300,000 (300,000)

基盤研究(C)一般

「言語リソースの評価からみた移動する人々の言語レパートリー変容に関する民族誌的研究」

1) 村岡英裕教授 2) 780,000 (180,000)

基盤研究(C)一般

「国際主義知識人のトランスナショナル・ネットワークと戦間期アジア太平洋国際関係」

1) 高光佳絵助教 2) 1,690,000 (390,000)

特別研究員

若手研究(B) 「日本におけるスタニスラフスキーシステム受容の系譜」 1) 内田健介 2) 1,820,000 (420,000)

若手研究(B) 「戦後日本映画の青春像 日活作品を中心に」 1) 千葉 慶 2) 780,000 (180,000)

若手研究(B) 「中世大学交流史から見る国家表象の再検討」 1) 黒田加奈子 2) 1,040,000 (240,000)

兼任教員

基盤研究(B) 発話連鎖アノテーションに基づく対話過程のモデル化(傳 康晴文学部教授)

基盤研究(B) 東アジア「近世化」と秩序意識の比較社会史 (山田 賢文学部教授)

基盤研究(B) 環境からの要約的特徴抽出に基づく適応的知覚処理の解明 (木村英司文学部教授)

基盤研究(B) 17～19世紀オスマン帝国における近代社会の形成 (秋葉 淳文学部准教授)

基盤研究(C) ウィトゲンシュタインのアスペクト論を通じた中期から最晩期への思想変遷の解明 (山田圭一文学部准教授)

基盤研究(C) 近代ロシア国家形成期における文学と空間表象 (鳥山祐介文学部准教授)

基盤研究(C) 付加要素に関する認可条件と意味解釈規則、及び言語処理に関する諸原理 (鎌田浩二文学部准教授)

基盤研究(C) 言語習慣と当事者評価から考える日本の外国人居住者の日本語習得研究 (高 民定文学部准教授)

基盤研究(C) 18世紀前半のナント海運業 (大峰真理文学部教授)

基盤研究(C) 相互行為の組織のための触覚的資源—身体接触を伴うコミュニケーションの会話分析 (西阪 仰文学部教授)

基盤研究(C) 社会的認知能力の個人差と視線・脳皮質活動との関連性に関する研究 (若林明雄文学部教授)

基盤研究(C) 所得格差の要因分析のための基礎的研究 (各務和彦法政経学部准教授)

基盤研究(C) 女性労働と子育て世帯間の所得格差に関する国際比較研究 (大石亜希子法政経学部教授)

基盤研究(C) コミュニティ経済に関する研究 (廣井良典法政経学部教授)

新学術領域研究(研究領域提案型) 裁判員裁判における量刑分析グラフの効果と意義 (佐伯昌彦法政経学部准教授)

若手研究(B) 乾燥地域農業の現代の変容と課題—イリ・カザフ自治州の施設栽培をめぐる動きから— (古澤 文文学部助教)

2014年1～12月

人文社会科学研究科所属教員（兼任教員を含む）による出版物

安井稔・久保田正人『知っておきたい英語の歴史』（2014年9月刊、開拓社、268ページ）

一千余年の英語の歴史を400字詰め原稿用紙100枚で書くと、どのような英語史になるか。本書はその一つのサンプルを示したものです。何を書くかということより、何を省くかということが問題になりますが、削ってよいと思われるものは、何によらず削りました。たとえばアメリカ英語は、英語という言語の性質を左右するほどに大きな位置を占めるにはまだ至っていないので、通史からは外しました。一言で言えば、現在の英語の基本的な姿が、どのような移り変わりを経て確立されるに至ったかを理解するのに必要な、最重要の事柄のみを記したのです。ただし、たとえば1,066年のノルマン人の征服 (Norman Conquest) によって英語に大きな転換があったというような通念に対しては、そのような事実はないということを、ある程度紙幅を割いて証明することはいとませんでした。通史の内容が圧縮された分、重要な話題については、各論で詳述しました。たとえば「第1二つ折版」(First Folio、1623年)でシェイクスピアを読む人は、大胆で奔放なエリザベス朝の英語に関する知識が必要ですが、それから50年もたたないうちに、「シェイクスピアの言葉は少し古めかしい」(D・ドライデン)と言われるほどに、当時の英語が相当急激な変化のまただ中にあったことも知っておいてよいでしょう。そしてその変化のありさまが、つづり字から手に取るようにわかるのです。たとえば*The Merry Wives of Windsor* (ウインザーの陽気な女房たち)の中でwill (エルが2つ)とwil (エルが1つ)が、同じ意味でありながら、使い分けられています。現代の読み手から見れば誤植かと思われる部分も、それぞれのつづり字がどこで用いられているかを調べると、当時の印刷法にたいする苦労と工夫がよくわかります。このような知識があれば、読み手が書き手の視点に立つことができ、じつにいろいろなことがわかり、読者冥利に尽きること、請け合いです。

日本知財学会知財学ゼミナール編集委員会編「知的財産イノベーション研究の展望」

(白桃書房(2014/12/6) 本体5,800円+税)

私(齋藤裕美)が編集委員の一人として編纂しました書籍について紹介します。知的財産、イノベーション、およびそれに関連する領域を展望した論文集です。資源の少ない我が国にとって、最大の財産は“人”であり、そこから生み出される“知識”です。知識は無形ですが、制度により知的財産として保護されています。知的財産は社会・経済活動にとって大きな影響力をもっており、知的財産をいかに創出・管理し、イノベーションを起こしていくかは企業にとって、そして国にとって重要な課題です。現状でこの分野でどのような問題があり、どのような研究がなされ、またどのような展開が求められているのか。本書はこれらのことについて、今後この分野の学術研究の発展に貢献することが期待される論文を厳選して収載しています。単なる学術書にとどまらず、知的財産・イノベーションの実態を踏まえて執筆されており、企業の立場からは技術経営戦略を検討する上で、また政策当局の立場からは知的財産政策や科学技術イノベーション政策を検討するうえで有用ではないかと考えております。いささか専門性は高いですが、各論文がそれぞれの立場からこの分野を展望するように執筆しており、どのようなバックグラウンドの方でも読むことができると思います。この分野のことを知るための入り口の便利な一冊です。

レイメント アンドルー 著 Fantasy, Politics, Postmodernity: Pratchett, Pullman, Miéville and Stories of the Eye

(Rodopi, 2014年6月刊 278 ページ(ペーパーバック)、ISBN: 9789042038585)

本著では、テリー・プラチェット、フィリップ・プルマン、チャイナ・ミエヴィルのファンタジー小説における政治的批評の内容と手法を取り上げている。これらの作家の小説が、人気のあるファンタジーという形式を用い、知的かつ倫理的懸念を提示しながら、現実世界に対して政治的に洞察に満ちた批評をどのように展開しているかについて、理論上広範囲で啓蒙的な説明を模索している。本著は2部構成。第1部では、小説の政治的に困難でかつ建設的な関与についての枠組作りを図り、詳述している。これらの作家は、読者に社会的現実を異なった視点から見させる、特に、様々な言語や社会的基準、社会的慣行がどんなに厄介かに気づかせるために、空想上ではあるが小説的には現実の構図を用いていると論じている。この新しい視点は、ファンタジー小説のテキストが空想的現実を現実世界の慣行や観念になぞらえて、様々な形を変えて実行することで実現可能となる。しかし第2部では、想像の世界での可能性を全面的に受け入れることで、政治的に洞察に満ちた作品を弱めてしまうと主張している。というのも、ファンタジー文学は過度な綿密さと自己陶醉に傾きがちで、際限なく「想像力をかきたてる！」という責務を全うしようとするからである。この責務が受け入れられる限りにおいては、小説は社会的現実との批評的洞察力のある関係を失うだけでなく、倫理的に不快で破壊的な欲望を示したり、さらにテキスト自体が不快で破壊的に成りえてしまう。ジジック、フーコー、トドロフ、バルテス、ボードリアール、バトラー、ラカン、リオタール、フロイドといった多くの思想家の著書を参考にし、洞察力を得るためにファンタジー小説が依存するヤヌスのような構造は、盲目状態で自我崩壊を促進する、まさにその構造そのものであると理論づけた。本著は、これらの人気を博す(そして呆れるほどに過小評価されている)ファンタジー作家を支持する初の学術的著書であるだけでなく、読者と同じ条件で大衆的ジャンルとしてのファンタジーを支持する初の学術的著作でもある。広範で通時的なアプローチをとるファンタジー小説理論家と違って、私は何がファンタジーのジャンルを構成しているかということに対する現在の一般的な理解に私は敬意を評している。共時的なアプローチをとり、本著は現代のファンタジーを理論化し、読者主導で限られた範囲内でのみ理解されているファンタジーが提供しうる可能性を支持している。私は、ファンタジー文学が、空想的な要素を含むどのようなテキストも広義の分類として新しく解釈すること(正統な作品に嘲った分類をあてがう新しい解釈)によってのみ救われるという学術的総意に強く異議を唱え、また、学者がファンタジーは一般的な定義から「救われるべき」用語であるとみなすのは、非常に横柄であると考えている。

Jacob Held, James South 編Philosophy and Terry Pratchett (Palgrave Macmillan, 2014年11月刊、328 ページ (ペーパーバック)、ISBN: 9781137360151)

共著者一覧: Jacob Held, James South, Andrew Rayment, Jennifer Jill Fellows, Susanne E. Foster, Kevin Guilfooy, Joseph Keeping, Tuomas W. Manninen, Erica L. Neely, Jay Ruud, Ben Saunders, Dietrich Schotte, Martin Vacek

テリー・プラチェットは、作品の中での語りの力と超現実的なユーモアで世界的に絶大な人気を誇る作家である。しかし本著では、彼の別の側面、即ち、本格的な形而学的思考と洗練された哲学的洞察に富んだ人間としての彼の世界へ読者を誘う。13人の哲学者と文芸評論家が、人格的同一性、運命の本質、個の価値、実存主義の意味、一般概念の現実性、別の現実の存在といったキーとなる哲学的問題の研究を行った。前述の、また他の同様な魅力的なテーマを考える際、プラチェットによる35点以上のディスクワールド小説に加えて、歴史的に偉大な哲学者たちの思想が参考となる。第3章「‘Feigning to Feign’: Pratchett and the Maskerade」で私は、ディスクワールドシリーズの中における仮面とベール、演技と偽装、actingとplayingとplay-actingについて議論している。小説内でどのように二枚舌や二重性に関するテーマを際限なく多様化しているかという点、そして、何事も他のベールを用いることによってしか覆い隠すことはできないという精神分析上の真実を延々と演じている点に着目している。プラチェットをゴフマン、リビエラ、ラカン、ジジック、サイード、バトラーの思想との対話に入れることで、彼が、主題は常に偽装しているだけでなく、その偽装は常にすでに主題の唯一の現実であるという概念を再利用し反復していることに言及している。もちろん、プラチェットの特徴は、私たちの世界に対する直観的理解は間違いであると暴いている点にある。パフォーマンス・ヴィティティに関する説明の中で、彼は、偽の表面的仮面とその裏に深く隠された現実との間、即ち、「私たちが本物の自身であること」と社会が私たちに要求する役割を演じることとの間に敵対関係が存在するという私たちの直観的理解を取り上げている。再三再四、プラチェットは、私たちが仮面に対し誤った認識を持つことによって、どのように私たち自身を欺き、このような単純な双対が存在していると思込まされているのかを表現している。つまり、仮面はそれ自体、真実を隠すようなことはせず、むしろ、真実とウソ、仮面装着と演技という奇妙な関係を曖昧にする機能を持ち、その裏側に実在しない何かを暗示する目隠しの役目を務めているという事実をプラチェットは提示しているのである。

人文社会科学研究科博士後期課程大学院生業績(メディア掲載)

文化科学研究専攻の大塚萌氏の学会発表「日本マンガのドイツ語翻訳テキストの比較研究」が2014年8月8日北海道新聞の「マンガ最前線」で取り上げられた。